三河アララギ

平成三十年　2018年

七　月　号

第六十五巻　第七号

ニューヨーク日記（141） http://blueshoe.copetin.com/

BlueCat, Shoe Lady

Blue Shoe Diaries

綺麗〜！ いい色！ いい香り！ ゴックリ！ 美味しい〜！ お替り〜！ って繰り返ししながらメンドサでいい感じのワイン漬けになってきたよん！

Beautiful! Mmmm, nice deep purple! Enchanting aroma. Sip, sip! Yum! Gimme more! Repeat. Ahhh that's the life in Argentine wine country. Loving Mendoza. I'm in love.

目次

第六十五巻第七号（通巻七七五号）

表紙・枇杷　今泉　由利（1）
ニューヨーク日記（141）　Blue Shoe（2）
黄素馨の門　御津　磯夫（4）
三河アララギ歌集Ⅴ　大須賀寿恵（5）
歌集「續草々」　今泉　米子（6）
三河アララギ歌集Ⅴ　河原　静誠（7）
茫々として　岡本八千代（8）
さみだれ　弓谷　久子（10）
温もり　内藤　志げ（12）
米寿　阿部　淑子（13）
阿形畊形　今泉　由利（14）
流鏑馬　安藤　和代（15）
図書館　清澤　範子（16）
心と体　伊藤　忠男（17）
群雀　森岡　陽子（18）
キヌサヤエンドウ　白井　信昭（19）
梅花卯木　杉浦恵美子（20）
サボテンの花　山口千恵子（21）
ただただ凡事　夏目　勝弘（22）
歌集「夢のつづき」　水上　信子（23）
『ことよせ』　いーはとぶ　水野　絹子（24）
牧原　規恵（24）
稲吉　友江（24）
鈴木美耶子（24）
吉見　幸子（24）
牧原　正枝（25）
石田　文子（25）
森　厚子（25）
山崎　俊子（25）
三田美奈子（25）
現代学生百人一首　東洋大学
池尾　愛花（26）
奥野　愛花（26）
野村　華奈（26）
寺田　想（26）
石川　結丸（27）
倉重ことみ（27）
大谷　将和（27）
山中　実祐（27）
森岡　陽子（28）
贈呈誌
童謡　長崎の鐘は鳴る　高橋　育郎（30）
『俳句』
森岡　陽子（32）
田中　清秀（32）
浜田　紀政（32）
松本　周二（33）
重野　善恵（33）
今泉　由利（33）
柳田　晧一（34）
山迫　京子（34）
山元　正規（34）
植村　公女（35）
今泉　如雲（35）
杉浦　弘（35）
田中　清秀（36）
丸山酔宵子（38）
かさね吟行会
『酔いの徒然』（75）　大橋　望彦（40）
ある自然科学者の手記（74）　江上　浩二（42）
「江上浩二の独り言」　今泉　雅勝（44）
絹の話（92）　山本紀久雄（46）
楽しい時間（68）　平井　茂行（48）
漢詩研修（二十一）
『山陽をめぐる女人たち』　中屋　保之（50）
『歴代天皇御製歌』（九十）　貫名海屋資料館（52）
本田カイロプラクティック先生の日めくり　本田　勇気（54）
御津磯夫短歌鑑賞　鮫島　満（56）
「氷魚」のことから（210）　岡本八千代（57）
編集室だより〔二〇一八年五月〕　今泉　由利（58）
野菜・まんだら（5）　森岡・今泉（59）
「三河アララギ」について　（60）

黄素馨の門（昭和四十一年～昭和四十四年）

御津磯夫

たてのものよこにもせざることわざに一生を老いて怠るたのし

鉢三百たもち枯らさず十年をいくつかさねて紫草（むらさき）はまだ

竹村の奥もあかるし花すぎし竹ことごとくかがやきて立つ

湖の光ここに及ばず檜ごもりのみあとの石に若萌えのとき

心あてにのぼるも苦し志賀山寺竹の葉がへの黄なる坂みち

のこされし竹の子のびて竹の葉の散る竹の秋志賀の山中

志賀寺の山のまにして流れなき谷もましろき沙ひとところ

遠き代のみやこすたれてのこる道湖をただ指し南へくだる

たひらかに湖見（うみ）おろしの五年（いつとせ）の御宇天皇をいまはわが思ふ

夏の朝のかすみの奥のかたよりに淀みて青くなりゆく湖を

三河アララギ歌集Ⅴ

大須賀寿恵

夏休み過ぎてふた月虫籠に首なくなりしくわがた二匹

霽れ上りし舗装路の上に未だ濡れて光るは桜のもみじ葉にして

十日余り早き今年の初氷庭の水槽に解けはじめたり

やぶ梅の枝つたひつつ遊びをり胸毛美しき放れ文鳥

夕餉終へてひとりのぼれるベランダより低き鋭き二日眉月

夜更けてひとり帰り来る野添の道暗渠流るるかすかなる音

澄みながら豊かに流るる用水路の水藻にひとつ台湾螺

ひとときの雷雨ののちの用水路を刈り草片よりてはやく流るる

雷ひとつ轟きすぎたるあかときを鳴き澄めるかなひとつこほろぎ

明日こそは何かよきことありぬべし夕茜空ひとり見て佇つ

歌集「續草々」

今泉米子

白々といまだ萌えざるプラタナス竝木古木の親しかりけり

翁草の翁となれる銀の絮一夜の風にあとかたもなし

切り込みのある貝割れの厚くして異國にほひてハカランダ萌ゆ

貝割れより尖れる葉先萌えはじむハカランダの花になりてゆくべし

誘(いざな)ひて著莪を剪らしむ庭の奥この夕かげに幼うぐひす

二日ばかり休診したる窓に迫りさわさわこぞるみどり錦木

裏庭に沿ふ道の上にさしいでてさくら若葉に風わたりつつ

雑草にまじりて今年も生うる蕗時に採るなり五六本ほど

変ることなきがごとく過ぎながら日に照る今朝の皐盧の若葉

37×15は555暗記してゐる計算のあり

三河アララギ歌集Ⅴ

河原静誠

百余段の石の階登りていま祖師法然上人の御廟の前

法然上人の御廟に独り籠りたり称名正行の一行修む

今日一日吾は御廟に念仏す香の煙のたゆたへる中

お木曳の法被姿にて大神の御前に尼の吾も待りぬ

あえかなる淡紫に撓みつつ桐壺咲きぬわが浄願寺に

見る夢は幼き日のこと多くして一つ赤き手毬奪ひあふ

吾が為に山の媼の摘みたまふ薬草七種を今年も飲まむ

薬草を冷茶と思ひ吾は飲む薬師如来のダラニ称へて

朝の花夕の花と匂ふ庭弥陀の浄土と深呼吸をする

吸ふ息も吐く息もあり経を誦すわが前に立つ香の煙一条

茫々として

蒲郡　岡本八千代

庭一面茫々として緑色われも茫々としてここに立ち竦(すく)む

けふの今われに在りせば君を呼びこのかの緑の庭を見せたし

一(ひと)日毎元気になりしごとくして人はわれをば明るき人といふ

夕影になづなの草のゆれてをりなづなも淋しか静かにゆれつつ

なづな草ペンペンとふ音もなくけふの一日の暮れてゆく中

わが夫を「偲ぶ会」とて招かれぬ折りしも降りくる初夏(はつなつ)の雨

「偲ぶ会」元バレー部の生徒たち七十歳とかそを越えしとか

持ちゆきし夫の写真がほほ笑みをりああ形原中学校の彼(か)の時々よ

繁げる葉の梅の木下の亀石に腰かけてゐしあなたは今亡く

君の部屋にありし表紙の赤き本「へたも絵のうち」守一(もりかず)の本

守一(もりかず)の「へたも絵のうち」読むうちにわれも描きたくなりくる不思議

竹の子はやたらに出でて笹みどりなよなよゆれるこの昼風に

しばらくを稲生(いのう)の海の夕風に独り静かに吹かれてをりぬ

生徒らにさそはれくれば堤防に君がゐたりしこと思ひつつ

夕暮の合図の鐘が鳴りはじむ稲生の海のけふの安けさ

さみだれ

豊川　弓谷久子

さみだれと言ふやさしき言葉を懐しむ又も豪雨の五月の空よ

大雨の一夜明けたり晴れ渡る五月の空に鶯の声

出掛け行くあても無けれど晴れれば楽し黄金週間行楽日和

故郷の五右衛門風呂の湯に浮かぶ菖蒲の香りを思ひ出す宵

陽に透かし虫穴調べる古けれど絣柄よしブラウス縫はむ

捨て難き着物は服に再生す昔気質の捨てきれずをり

草花の本を見ながら乱れたるペチュニアを子は剪り戻しをり

それぞれの花を培ふ子には子の我には我の好みもありて

朝顔の苗移植せむとりどりの花咲く朝を胸に描きて

小学校にて覚えし一句よ「朝顔につるべ取られてもらい水」

芽生えたるマラカス虫に食はれしと子は嘆きつつ又蒔き直す

少しづつもとの生活に戻るとありぬ圧迫骨折の去年の日記

咲き初めし花並べ置く門先まで我がささやかな紫陽花ロード

むし暑き一日暮れゆくはやばやと四国九州梅雨入りせしと

一日が一週間が一月が過ぎゆく早し梅雨も真近し

温もり

豊川　内藤　志げ

姉様の逝きにし後はわれ一人部屋に籠りてとろとろ眠る
たまさかに娘が訪れこのままでは明日は死ぬよと後は分からず
妄想の世界は長し一瞬を誰にも云えず幻のなか
妄想の世界はパソコン並びわれも料理を作りておりぬ
両の手を頭に合せ真黒な私が深く沈みゆくさま
決めおきし時間に門にて車を待つ娘は一分も違はずに来る
われを引き小走に歩む娘にてそんなに早くわれは歩けぬ
家に居て三度の食事は呼びくれる家族揃ひて夕餉のうまし
何処よりも家のベッドは心地よしデーサービスなど断ればよし
雨止みて久しぶりにて歩む径息子が草を倒したる径

日向径にて冷たき足の甲に陽を当てぬ足に温もりようやく感ず
ドシャ降りに客のあるのか冷たきなか穂乃香は決めしアルバイトにゆく

米寿

横浜　阿部淑子

五月晴れに米寿を迎えし誕生日祝電花束満ちる幸せ
白寿まで十二年かと淋しくも充ちたる今を重ねゆきたし
母の日に心を込めしスタッフのランチを囲み思い出語る
栃木より堀りたての筍送られてスマホ片手に調理も上等
香り立つ皿に盛られし筍はスピード箸でたちまち空に

阿形吽形

東京　今泉由利

爪先に万力集め仁王立ち江戸を守りぬ東京守る
阿形吽形大江戸守る仁王様頼もしくして離れぬ暫し
三本足八咫烏を思ふときわが窓に来る二本足の雀
最初は「あ」最後は「ん」サンスクリットと日本語と
掃き寄せし常磐木落葉のその上にまたひと葉散るまだひと葉散る
太陽の光りを返しキラキラと今年若葉のこの一瞬を
まろまろと稔りの黄も垣間見ゆぽとり落ちこし増上寺梅
インカなる「すべてのものに命あり」今日の私のインカの心
権現の山の頂(いただき)辺りにて行くも帰るも大坂急坂
権現の山頂辺り我家にて蝙蝠(こうもり)滑空守宮(やもり)走行

流鏑馬

豊川　安藤和代

砥鹿宮の祭り花火よ静寂の朝をさきて山にこだます
父に抱かれ流鏑馬を見し幼な日をしのべは遠く山鳩の声
嫁植えしミニバラ一本神前に供うれば嫁の笑顔がうかぶ
庭草に一センチ程の蟷螂のあげたるかまが命光らす
柿若葉輝く朝片ことの蛙の声よ夏はすぐそこ
用水の岸のみどりも伸びのびて水音も又リズム高らか
晴天のつづきし庭の葉の陰に三日も蛙動づことなし
体調のよき日は朝の検温も忘れていたり咲くアマリリス
孫帰省足腰肩も痛み消えいそいそとして混ぜ御飯たく
卒寿のる車いす押す古稀の娘に藤波やさし香りのやさし

図書館

春日井　清　澤　範　子

高蔵寺の線路の土手の虎杖（いたどり）の生ひ繁りゐて吾れに触れつつ
三河アララギ誌岡崎図書館に置かれるを友の便りに吾は知るなり
ハンバーグ刻む玉葱目にしみる心の涙もともにあふれて
八王子神社へ願ひ詣できて夫の白髪軽ろく刈るなり
狭窄症また前立腺癌と戦ふる夫の肩をもみほぐすなり
新緑の柿の若葉はさわさわとそよ吹く風にゆれて光りぬ
前立腺のホルモン剤をのむ夫の次の予約日をカレンダーに書く
苛立てる心に空を仰ぎ見る白雲は静かに形変えつつ
八王子神社の舞台に腰をかけ心和むよ歌書きをれば
娘には頑張れ頑張れ励まして吾は神社に祈り祈りて

心と体

大阪　伊藤忠男

サツキ咲きツツジ後追うふるさとの出迎えいつも蜜かほる時
そよ風に和むひと時とき止まるお茶嗜(たしな)まん濡れ縁の宵
痛む足寝起きか雨か寒さでも治すは歩き歩くあるのみ
歳ととも楽しき記憶のみ残し苦し思い出忘れるが良し
日々疎く成りし記憶もよしとせん良しき悪しきを選べるとせば
時流れ時はうつろひ今をもて見果てぬ夢の有るを誇りに
あれもこれこれもあれだと邪推する疑心暗鬼は気の病なり
病より落ちた体力いかほどか余力残してここ出られるや
まさに今無心無欲かさにあらん気概あるこそ生があるなり
気持ち揺れ体ふらつく花曇り滅入る心に闇が追い討ち

群雀

東京　森岡陽子

初夏の森の公園一歩入るにほひ変るは雨の止む朝

夏浅きぶらりと行くは遊園地跡懐かしき幼かりし日

自転車でハミングするは女の子夏めく休日向うは何処

少年のスマホをいじる綺麗な手細き指先リングが二つ

浅い川三つ四つ置かれたる飛石飛びつつ桜ん坊拾ふ

群雀青芝の中に混じりゐつ隠元豆を啄む啄む

初夏の木々の緑は色増して木洩れ日は射すかたばみ黄花

競走馬青々新芽の夏芝を富士山に向かふコースを駆ける

泥濘る丸山古墳を登り行く東京タワーと増上寺見ゆ

千躰の子育地蔵の風車初夏の風受く家族の愛うく

キヌサヤエンドウ

豊川　白井信昭

植えかえてキヌサヤエンドウようやくに白き花咲き揃ひて花壇に
二連覇の期待に応ゆ選手六十五年ぶり前人未到とぞ
名神と一般道をきて道の駅雨やみ寒く伊吹の里に
湖のさざなみ街道走りゆく琵琶湖周遊の歌聞きながら
湖をば後にＲ８戻る道少し明るみ青空のぞく
南濃へと向う名神空は晴れ行楽日和の月見の里に
み社の楠（くすのき）古木若みどり五月の日差しに照り光りまぶし
エンドウの花のうてなに見つけたり小さき実ひとつ今年の初なり
八本の蔓ともどもに支柱越実の増しきたり五月も半ば
とにかくもさがらの森は恋しかり思い出の山思い出の川

梅花卯木

蒲郡　杉浦恵美子

瞬く間五月来にけり夫逝きし八年前を思ひ出す月

我が庭の梅花卯木を剪り取りて夫に捧げんもう直ぐ命日

想ひ出が此処にもひとつ鎖されり夫と通ひし小さき鮨屋

屋台鮨鱈腹食べてもお仕舞ひに鉄火求めし夫にてありき

斯くあれど夫への想ひこの頃は沁々しをり諦めにも似て

青春を名古屋暮しのこの人には半世紀前の名古屋が生きてる

栄にはオリエンタル中村あったっけ共通話題は消えしものばかり

啄木の墓はぽつんとあった筈今は目に付く立待岬

この冬を我が暮したる証かと思へばこその綿埃かな

天才故無実の罪に殉ぜしか小説畢山を鬱々と読む

サボテンの花

豊川　山口千恵子

ビンに挿す芍薬の花一輪の花びらはらはら花のはかなさ
道端の春草青き叢(くさむら)より虫喰ひあとある四つ葉のクローバー
小さきことに拘はり続ける朝なり柿の若葉のわかわかみどり
ここにありしノボタンつひに絶えたりと思ひつつ庭の草ひきてゐる
さわさわと青き麦の穂ゆるるなり五月の風の今朝は清しき
はびこれるドクダミ抜きてこはばりし両の手夜にはさすりてゐたり
白き花咲きゐるドクダミ抜きてゆく軒に干しゐし母想ひつつ
鮮やかに赤極まりて咲きにけり一花だけのサボテンの花
五月とはとても思へぬ今日の日よ窓のガラス戸網戸にしたり
尖りたる巻葉出で来しモンステラ先に光れる一粒の露

ただただ凡事

豊川　夏目　勝弘

爪楊枝の使へる歯のまだありぬ諸行無情のまっただなか
一メートル余りを飛ぶ夢多かりき今は中空まで飛べる夢
この頃は凡事凡事の日日なりきこの生活が死ぬまでつづく
凡事とは愚かなることさにあらず我が修行と思はねばならず
朝朝に大根卸す十数分が無心となれる楽しき時間
命をば守りてくれるが食事なりなれば己れで作らねばならぬ
命をばつなぎてゆくが食事なり凡事でありて凡事にあらず
同じ物同じ量を作りて食べる美味し不味しはその日の思ひ
同じ物同じ量にて時間も同じ凡事徹底と静かな時間
夜勤明け昨日休みのこのパターン若き日には嬉しき時間

歌集「夢のつづき」

水上信子

山々の緑の彩の目にやさしトンネル出るごと色深まれり

車窓より見ゆる景色もなじみなり母を見舞いて幾度も通りき

弟の家族に連なり遊をする幼うからの数増すうれし

幼らはなじみ少なき大伯母に笑顔見せたり手を伸べきたり

五月晴れわが旅ごころ満たされぬ新潟のあお長野のみどり

明け方の激しき雷雨覚めやらぬ夢に入りこみかき乱しゆく

爪切りぬ夜に切るのは忌むべしと母の戒め解かれてしばし

美術館一巡りして梅雨晴れの箱根の山に初蝉を聞く

なよやかに後ろ姿を見せて立つ師宣の絵は江戸の華なり

仁清の壷さりげなく展示され美術館内の静寂やよし

『ことよせ』

（西浦公民館　いーはとぶ）

我生(あ)れし緒(いとぐち)なりしか「あざみの歌」若き父母(ちちはは)偲べば愛(いと)し
かつて伯父の我にくれたる山吹よほつほつ咲き初(そ)む灯明(ほあか)りのごと

水野絹子

収穫の小さき玉ねぎむきてをり無心になりて夕暮れの庭
大雨の予想だにせぬ濁流にポットの苗は跡形もなし

牧原規惠

今年もまた戻りては来ぬかつばくらめ壊れたままの巣は軒下に
帰り来る紺のジャージの中学生ら清き笑顔よ夏風の中

稲吉友江

おひとりの日々綴られし先生の心に染みる歌の十五首
「ことよせ」の原稿ポストに入れる時そつと傘さして下さる先生

鈴木美耶子

清き川の流れ静かな五十鈴川玉砂利踏みて我ら御正殿へ
何故かしら春彼岸の夜亡き父母の姿を我は夢に見にけり

吉見幸子

石畳その参道に土盛らる流鏑馬（やぶさめ）すぎしか蹄の跡々
まぶしげなる大仏様に供へあり乾きし筍蓮台に一つ

牧原正枝

角曲り風の強きに足止めつつ花粉も飛ぶよ墓へ行く道
空木の花白く五弁に開きたりわが机の上に可憐に

石田文子

買ひ物を終へて自転車漕ぎ出せば愛宕の山にはやおぼろ月
吾が植ゑし低き金雀枝（エニシダ）生ひ立ちて今咲きあふる黄色の花花

森　厚子

さくらんぼのほの色づきしにムク鳥ら飛び交ひ食みをり熟れし実見ぬまま
せはしげな鳴き声近し玄関にツバメ飛び入る良ききざしかも

山﨑俊子

葉桜の岬に来りて鐘を撞くあなたの御霊の安かれと撞く
うぐひすの一声鳴けりしとしととこぬか雨降る深溝断層

三田美奈子

現代学生百人一首

東洋大学

ひがん花満開にさく一列にまっすぐみんな子どもが見ている

堺市立新浅香山小学校四年（大阪府）池尾愛花（いけおあいか）

だんじりのそうりゃあかけ声おいかけるひこうき雲の空、ふとながめる

堺市立新浅香山小学校四年（大阪府）奥野愛花（おくのあいか）

寒いとき集まってねってあったかいエコのぬくもり

堺市立深井西小学校三年（大阪府）野村華奈（のむらはな）

さいごまで残るのだれか対決だ火花とびちる線香はなび

大村市立富の原小学校五年（長崎県）寺田想（てらだここな）

ポケモンＧＯスマホ片手に歩いてたらセミの死がいをふみそうだった

大村市立放虎原小学校六年（長崎県）　石川結丸

キャンプの日なにしていても虫がいて二日ずーっと虫パラダイス

大村市立放虎原小学校六年（長崎県）　倉重ことみ

二十二時一人ぼっちの夕食を家族写真のほほえみが見る

東京学館新潟高等学校一年（新潟県）　大谷将和

「ありがとう」死にゆく祖母の耳元にささやく母は娘の姿

香川県三本松高等学校二年　山中実祐

贈呈誌

森岡陽子

冬雷六月号

○電柱と老樹に蔦の這ふ見れば爪切りをもて翌朝ちょん切る　関口正道
○つがひらしき鴨が水より上がりきて温く陽の射す冬芝を踏む　水谷慶一朗
○水面に届かんばかりに枝垂れ咲く花かげ潜り黒鳥泳ぐ　飯嶋久子
○真白なる花弁薄き利休梅弁天堂を守るがに咲く　山本述子
○少し空の暗みて捜す西空に腰かけたき程の細き三日月のあり　野村灑子

柊五月号

○やうやくに気温あがりてどの屋根の雪みな丸みを帯びて光れり　山田範子
○月食に欠けたる月のすぐ横を飛行機飛べり触れむばかりに　三谷和夫
○諏訪明神の逢瀬果せしか待ち待ちし御神渡り成る五年ぶりなり　小平せい子

鹿児島アララギ五月号

○被災地はいづこも段丘つらなりて見づらき海に人影もなし　千葉源治

○ことごとく若葉燃え立つ山面（つら）にとり分け椎の茂りたくまし　堀之口ふさえ

○昨日の雨に黄沙の洗ひ流されしか今日は紫匂ふ桜島に戻る　益山苣子

【明治記念綜合短歌大会作品】

特選歌

○放射線量側定値無き日々の屈託のなき空思い出づ　遠藤雍子

入選歌

○カナばかり一〇〇歳まぢかの母の文なめた鉛筆くせ字がにじむ　波多野保延

佳作

○飛び立たぬ子を促して親燕くはへし餌を見せつつ飛べり　田中礼子

○駄菓子屋も酒屋も地域に姿消し床屋の明り吹雪に点（とも）る　山崎修

長崎の鐘は鳴る

髙橋育郎 作詞

1

宇宙をめぐる　人は見る
ひときわ光る　あの星は
あれは地球　美しい
伝えてゆこう　この喜びを
平和のくらし　みんなで守ろう
長崎の　おもいをこめて鐘は鳴る

2

あの日のことは　忘れない
ひらめきおそう　まぶしさは
あれは原爆　きのこ雲
惨禍極みて　涙もかれる

永遠(とわ)の平和を　みんなで守ろう
長崎の　おもいをこめて鐘は鳴る

3

憎しみ遠く　消え去りて
ひたすら願う　めぐる春
花は咲き染め　鳥は飛ぶ
尊きみたま　導きたまえ
平和への道　みんなで歩もう
長崎の　おもいをこめて鐘は鳴る

平成7年（1995年）
長崎市被爆50周年記念　入選歌
50年史誌に載る

『俳句』

紫陽花は萌黄に初むる雨模様
雲立つる夏芝駆くる競走馬
飛び石の実桜いくつ拾ひゆく

森岡陽子

夏めくやうどん啜るも法のうち
新緑や永久の別れの鈴の音
若葉風祠におはす釈迦如来

田中清秀

母の日やセピアの母はモダンガール
ハンカチを手渡す妻の晴れ曇り
下校時のチャイムの街へ若葉風

浜田紀政

妻の畳みしハンカチの角整へり
吹き流しどこか勝利の風情あり
立ち泳ぎする子子や白き月

松本周二

ハンカチや使はれもせず箱の中
葉桜となりていつもの目黒川
蕗煮える匂い懐かし母の味

重野善恵

江戸生れ阿形仁王に若葉風
雛罌粟の小さき坊主よ相ゆるる
葱坊主天麩羅となりまるかじり

今泉由利

静けさや河骨の花ひとつ咲き
ハンカチは白と決まりし昔かな
聞く場所や鳴き方変はる老鶯

柳田晧一

苔寺のやぐらの崖や滴りぬ
石斛の花を古木に宿しけり
山寺の庭を辿れば時鳥

山迫京子

前山の夜気を濃くして田植終ふ
夕べにはハンカチ角を失ひぬ
じぐざぐにめぐる木道かきつばた

山元正規

かくれんぼ尻見えてをり柚子の花
白糸の一度で通り立夏かな
白靴の汚れ気になるひと日暮ゆ

植村公女

八甲田越えくる風やリラの花
海棠や津軽南部の酒くらべ
卯の花や城は駅から半里ほど

今泉如雲

葉ざくらの淡墨桜めぐりけり
小梅もぐ籠は左の腰に下げ
緑陰や琥珀のグラス傾けて

杉浦　弘

かさね吟行会
「芝増上寺」　五月

田中清秀

徳川家歴代将軍の墓所は上野の寛永寺と芝の増上寺の両方にある。家康は日光東照宮に祀られているが増上寺には二代秀忠、六代家宣、七代家継を始め六将軍が埋葬されており徳川家の菩提寺となっている。正式名称は三縁山広度院増上寺と称し浄土宗の宗務を統べる大本山である。

今回のかさね吟行会はこの増上寺周辺を散策した。平成三十年五月十一日、晴天の暑い一日だった。地下鉄大門駅から北へ真直ぐ進むと正面に三解脱門（三門）が威風堂々とした姿をみせる。一千六百二十二年に建立された東日本最大級の木像建築で国の重要文化財である。三門を抜けると境内は広々としており南北戦争の英雄で米国大統領のグラント将軍が来日時に植えたグラント松やクスノキ、イチョウの大木が生い茂り、芽吹きの若葉のみずみずしい緑に囲まれる。

若葉風笙の音聞こゆ増上寺　周二
緑青の屋根をおほひて樟若葉　由利
三門の避雷針めく電波塔　正規
夏の天どしりと受くる両の鴟尾　紀政

本殿の石段を登りつめたところが本堂で正面に本尊の阿弥陀如来、両脇壇には高祖善導大師と元祖法然上人の像が祀られ荘厳な雰囲気が漂っている。また、地下の宝物展示室には曾て境内にあった秀忠の御霊屋の十分の一の模型がある。これは明治四十三年にロンドンで開催された日英博覧会で展示されたもの。そして、本殿の裏側には戦災によって焼失した旧徳川家霊廟にあった宝塔の多くが改葬し祀られている。二代秀忠（台徳院）の宝塔は装飾華麗で当時の芸術の粋をつくしたもの、六代家宣（文昭院）の宝塔は永井荷風が荘重美麗な外観と壁画に感嘆したという霊廟に納められていたもの。十四代家茂の正室皇女和宮は江戸城の開城や徳川家の存続に尽くし変転激しい時代を生き抜いた。三十一歳の短い生涯を閉じた後、遺言により京都には戻らず夫君家茂と並んでここに祀られている。

風薫る潜む歴史や苔の墓　　**素山**
万緑や奥の菩提所風抜けて　　**陽子**
風薫る皇女の眠る増上寺　　**れい子**

ここ芝の地は江戸城の裏鬼門であると同時に江戸の玄関口の要衝の地であった。曾ての境内は、南は古川から東は現在の大門通り、北は御成門あたり西は桜田通りまでの広大なものだったという。そして、最盛期には百二十以上の堂宇、百軒を超える学寮が甍を並べ、三千の僧侶が修学に励む大寺院であった。維新後は徳川家の菩提寺だったことから明治政府によって芝公園とされ、さらに戦災で多くを焼失し、現在は周辺に高層のホテルが建つ。本殿の左右に並んでいた壮大な霊廟の面影はなく、僅かに惣門や勅額門などを残すのみである。栄枯盛衰、有為無常と言うべきか。

仏足石葉桜の影揺れにけり　　**京子**
緑風や南無阿弥陀仏の写経せり　　**皓一**
青梅をひとつ拾ひて廟の庭　　**清秀**

隣接するこんもりとした丘は芝丸山古墳で五世紀後半に造られた前方後円墳である。より古くは縄文時代の貝塚があった所でもあり力強いエネルギーを感じるパワースポットと言われている。丘の中腹にある丸山随身稲荷も霊験あらたかな雰囲気が漂っている。そして頂上からは正面に色鮮やかな東京タワーが青空に見渡せる。

句会は近くのレストランに於いて、いつものように嘱目三句出し四句選で行われ無事に終了した。

〈訂正〉

前回六月号の吟行文において「長明寺桜餅」を「延命寺桜餅」と誤記致しました。訂正致します。

■かさね吟行会■

日時　七月十三日（金）
場所　川崎市緑化センター
集合　宿河原改札口　十一時
　　南武線
申込　森岡陽子宛　(03)3712・2835

『酔いの徒然』（七五）

丸山酔宵子

『中国の今は・・・』

桜が散り始めた頃、突然思い立って往復の飛行機がフィックスされた個人フリーのパッケージチケットで上海へ。30年前によく行っていた安徽省へのセンチメンタルジャーニーである。上海から南京を経て内陸部深く進み、長江（揚子江）と淮河（わいが）の間に広がる中国最貧省とも言われていた。三国志の曹操が活躍し、黄山が有名で、峰と雲が織り成す風景は、まさに仙人が住む「仙境」の世界。

天安門事件（１９８９年）の前後10年程、在米華人有力者に安徽省幹部を紹介され、安徽省産品、特に安徽加飯酒【チャーファンチュー：浙江省紹興酒と同じ糯米から作る黄酒（醸造酒）】の輸入に関わっていた。因みに醸造酒の黄酒（ほあんちゅう）に対し、茅台酒に代表される蒸留酒のことを白酒（ぱいちゅう）と言うのである。

当時の上海は暗く寂しく、目抜き道路でも牛車が荷物をこぼれんばかりに積んで、我が物顔に罷り通っていた。安徽省省都合肥までは飛行機も飛んでいたが、めったに正確に飛ばず、特急列車の軟座で10時間以上もかかって行ったものだ。安徽省には合計30回ぐらい行ったのだが、合肥から揚子江を渡って北京まで列車で60時間かけて行ったこともある。

あれから30年。現在の上海は最新鋭の地下鉄が網羅され、高速鉄道駅の上海虹橋駅（シャンハイホンチャオ）へ。地下鉄駅では手持ちバッグは全てレーザーチェックが必要で、たとえ混雑していても、皆、行儀よく順番を待っているのだ。中国人の悪癖と言われた「並ばない」「痰を吐く」は「今は昔」。上海虹橋駅に着くとその設備、清潔さ、機能性に圧倒され、切符売り場には順番ラインがきちんと出来ていて、大型電子掲示板には状況が克明に表示されている。

定刻出発の高速鉄道に乗れば、時速３００キロを超す

スピードで懐かしの合肥駅へ。車窓からは菜の花畑が目に飛び込んで来て、その先には高層ビル群が蜃気楼のように聳えている。駅からタクシーでホテルへ向かうと、往時の田圃と泥道はハイウエイとなり、沿道には超高層ビル、驚くなかれ地下鉄まで開通しているのである。

天安門事件から4半世紀。「限りなく赤い資本主義」の中国の発展は凄まじい。食品偽装とか、信じがたい交通事故の様子とか、よくテレビの世界仰天映像で揶揄的に報道されているが、総合国力として確実にアメリカに肉薄している。今、習近平が国を挙げて取り組んでいるのが、「昔懐かしい仕切りの無い公衆便所（ニーハオ・トイレ）の大改革」なのだ。

菜の花の先に聳えるビルの群れ

酔宵子

ある自然科学者の手記（74）

大橋望彦

『バス友』

2年程前から腎機能不全による人工透析を行うこととなった。奥多摩には、対応するクリニックが無く、東青梅にある腎クリニックへ約1時間掛けて送迎バスが送り迎えをして呉れることとなった。

バスは運転者を含めて6名乗りのマイクロバスであり、奥多摩在住の5名の家近くまで送迎するシステムである。

朝八時少し廻った頃、迎えのバスが家の玄関前まで来て呉れるので、最初の客として乗り込み、一番後の座席に座り、順次バス友が乗り込み病院には九時少し廻った頃に到着する。帰りの送り車は、クリニックを二時半過ぎに出発して往きの逆経路線で各々送り届け最后が小生宅である。丁度一時間の行程である。

透析に要する時間は3・5時間、4・0時間が普通であり、それより長時間の人は、30分、60分等の延長時間というのがある。この延長時間となるとバスの発車が延長した時間丈遅れ、皆に迷惑をかけることとなる。延長しなくては、ならなくなるのは、大体が前の日に飲み過ぎ、食べ過ぎによる体重過剰に基くことが多く、本人は恐縮している。

透析の日は、週の月・水・金曜日が割り当てられているので、土・日曜日が連休となる。この様に、一週間、即ち七日の内三日間が透析に遣いやされるので、今後の人生のことを「七・三の人生」と稱している。この範囲は必ずしも誰かに定められたものでもなく、「必然的」に決っている。従って、バスに乗り合った人達は、どうしても、同じ様な「七・三の人生」を過ごすことになってくる。それで勝手に小生は、同乗する特定な人々のことを『バス友』と名付けている。バス友の人達の考え方は、比較的に近いと思っていたのだが、意外に違っていた。

バス友となったのは勿論、同じクリニックに通う人達であるから、人工透析患者という事で一致している。既に第二の人生といった生活に入った方ばかりである。御

婦人もおられるが、それぞれ御亭主が大変良くケアして居られる。一方、男性の方達は、既に定年退職をされ、悠々自適の生活に入っておられた方ばかりである。

二年以上になると思うが、バス友の方達に毎回弁当箱に詰めた「あめ玉」を提供し、好きなだけ、好きな物（数種類のあめが入っている）を選んで戴いている。このキャンディ・サービスは思わぬ効果を生んだ。それは、考えも及ばなかったのだが、それは、皆の会話が可成り以前と比べて、打ち解けてきた事である。それに、皆が互に気を遣っているのも事実である。もっとも、時間的にグズが居て、二人の男女がいつも遅れ、それに小生が加わって遅（おそ）かった。小生の場合は、スタートが遅れ、順番待ちで遅れてしまうので、20～30分黙ってベッドの中で待っていることがある。余りスタートがおそい場合には、昼食（弁当持参）を割愛する場合すらある。しばらく昼食を摂らない日が続いた頃、看護師が気付き、順番が早くなり昼食を摂ることが出来るようになり、それでバス友の皆さんを小生のために待たせることは殆んどなくなった。

話題の内で、圧倒的に多いのが食べ物の話である。バスの車窓に映るそばやさんの旗が見えたと思うと「どこそこのそばを食べたら意外と美味しかった」「そう、どう行くの」…といった具合に話は進む。献立、価格、何が美味しいか、特殊な味付けとか、器のセンス等々が話の内容となる。コミュニケーションで大事なのは、これら話の内容が豊富であることだ。健康問題に関しての話には、終りがない。大いに真面目に取り扱っているのである。一人の女性の方は、病院へ行って診てもらうのが良いか、悪いかの判断で迷っておられ、話の内容から、何科に行けば良いのかも大事なアドヴァイスとなる。

『バス友』は独得なコミュニティであるが、よく言う「老人会」とか、「デイスクール」とも違う性格をもつ集団とも解釈している。いわば小さなクラブが形成されている様にも思われる。年代的には、随分ひなびた集団ではあるが、この世代になってから新しいこのような集団に出会う事が出来たのも不思議としか云えない。

「江上浩二の独り言」7

江　上　浩　二

岡本太郎　（2）

平成30年4月9日、自宅で仕事部屋兼ジャンクルームの断舎利をしていたらこの独り言をプリントアウトした紙片（前月号の独り言）が出て来た。読み返すと平成17年記すとあり、文末で、しばらくして岡本太郎に会いに行ってみようと呟いていた。その呟きから約13年も知らずに過ぎてしまった。

最近、旧大阪万博跡にある太陽の塔がリニューアルされて、再び多くの訪問者の眼を楽しませているというニュースを聞いたが、しばらくすると来場者数は期待していたほどではないという、追いかけのニュースを聞くと現代人には太郎の想いの念力も効かなくなっている時代に変わっているのかとも、少し寂しい。

また、別なことも頭に沸いてきた。岡本太郎と知の関係を呟くのに関係なさそうであるが、ある出版社の記者との逸話をまだ口外していなかったのか定かでないが、お話ししよう。私が昭和の時代53―60年頃、電気会社に勤めていた若い頃（24―32才）に、ある先輩がいて、両親が文筆家とお聞きしていていた。先輩が米国へ転職し、私もその後転職し、消息を聞くこともなく十数年が過ぎて、その先輩が帰国され再会できた。先輩との雑談の中で、〝俺の父が若いとき岡本太郎の原稿取りをしていて〟、よく自宅（おそらく青山にあった頃）押しかけたそうで、酒が好きな岡本太郎を新橋界隈からご自宅までお供したような関係だったそうである。こんな話では太郎の知的挑戦に係わる呟きに繋がらないが、私にとって、偶然再会した先輩のお父様を介して岡本太郎の人となりを知って非常に身近になったことは、知識・情報が積み重なりある種の構造化した成果と言える。

さらに、記憶をたどると、東京都庁が高層化し西新宿へ移転する前（１９８５―９０年頃）に、今の有楽町国際フォーラム辺りに旧都庁舎があり、取り壊す前に一般の都民が立ち入れる建物のある処に太郎の作品がオブジェとしてあり、そこを見学したことを思い出した。

さらに、続く時は続くもので、平成30年4月の中旬（正確にいうと、紙片を見いだした9日から1週間後の16日）、出けた先のあるカフェ風のお店でお客用に本棚があり、古本が置いてあった。般若心経・・・という見出しに引かれ、直ぐさまその古本を手に取った。著者は大城立裕氏、発行は１９８１年、正確な著名は般若心経入門である。

なぜ、般若心経のタイトルに惹かれたかという理由も述べなければならないが、最近インド仏教の経典の梵語・サンスクリット語を古代中国が漢字化した時代の経緯を知り、音写と意訳の2通りで訳された語彙が、後年日本へも輸入され、多くのところにサンスクリット語をベースにした語彙が、それとは知らずに我々は日本語として使ってしまっていることを知ったのであった。例えば知に関するもので、知恵があるが、本来は智慧という仏教用語をベースにしているという。さらに表紙をめくると、おっと、なんと岡本太郎の推薦文がお出ましになったのである。沖縄の大城氏と岡本太郎には交流があり、初めは大城氏も太郎の母、岡本かの子氏との

接点があり、太郎と知り合うようになったと本文に紹介されていた。私の最初の川崎・二子での出会い（現高津区二子は岡本かの子の実家大貫家があった）と似ている。

太郎の言葉は以下のように吐かれていた。

色即是空、空即是色、強烈な世界観だ。
しかしこれをただ頭で考え、言葉で受けとめるだけでは、大した意味はない。生活の中に生かさなければ。大城立裕は自らの戦争体験を重ねあわせ、これを噛みくだく。
私はかつて沖縄に行き、島々の清らかな気韻、透明感、その凄みに打たれて「沖縄文化論」を書いた。沖縄には無の豊かさ、存在の原点で生きている充実感がある。だから沖縄の人、大城君がこの般若心経にぶつかって感動したのは自然である。
現代人は無のなかでナマ身で生きる、無即有の生命の自在さを失ってしまっている。豊饒な空の世界にこそ目をひらいてほしい。

出張先のカフェでこんな形で、13年後の再会になろうとは微塵にも思わなかった。13年前の本意は生田にある美術館にまた訪れたいという軽い気持ちだった。また、〝無〟に関する呟きにも少し腑に落ちたのであった。無と空とは完全には一致しないが、般若心経の色即是空は物の因果関係性から説いたもので、物が無いのではなく、例えば食物連鎖を考えると、最初の植物性プランクトン→動物性プランクトンがいないと、連鎖の最上位にいる人は生きていけない、存在できない。このような因縁・因果の関係性が世の中には沢山あり、人の営みを支えてくれていることを教えてくれている。岡本太郎の豊饒な空の世界はなんと素晴らしい。人は手にとって確認可能な物質的な言葉と、人が考えたり、想像したり、抽象的概念を示す言葉とを創造しそれらの因果関係を、自らを豊かにしていると思わせてくれた。

平成30年4月25日（水）、仕事で出かけた横浜からの帰り道で東横線を久々に利用し田園調布の〝太陽の塔〟を再確認しようと決めた。何しろ数十年前の古い事なので、私の勝手な思い込みで、その塔が有るのか無いのか、建造物自体が残っているのか心配したが、正に残っており、〝鎮座〟していた。通り過ぎる電車の中から観察すると、それは屋根の千木みたいな位置にある大きな丸い飾り物のように見えた。後で調べると、それは世界真光文明教団の建物と分かった。遠目に〝太陽の塔〟と信じ見えたものは、その宗教団体の星をモチーフにしたシンボルであった。

大阪に行く機会は無いわけではないので、川崎・生田の山でなく大阪万博跡のリニューアルされた太郎と本当の再会をしてみたいとも想っている。5月1日この原稿に終止符を打とうとしている時、大城氏が1967年沖縄初の芥川賞を受賞されていたことを知り、なんと私の無知を曝け出すことか。

絹の話（92）

「アトリエトレビ」今泉雅勝

絹の健康利用…シーツ、毛布を作る

絹の機能性利用活発化による絹新利用

20年位前「食べる絹」が発表されてより、各研究機関で急速に絹の機能性が研究され始め、昨今では絹入り化粧品、石鹸、サプリメント、人工骨、下着等々活発な開発が進んで来ました。

絹は表面25％前後がセリシンと云う蛋白質で、芯に当たる部分の75％位がフィブロインといわれる蛋白質です。一般的にはセリシンを除いてフィブロイを絹として利用し、セリシンは産業廃棄物にされていました。

ところが捨てられていたセリシンの方がより諸機能性が高いことが判って来て、医薬品など医療関係利用に研究が盛んになって来ました。

また、蚕は医薬品開発の基礎実験動物として利用し始めました。

健康用品　タサール蚕（野蚕）糸でシーツを作る

美容、健康、機能性などの言葉は若年層のみならず、老若男女誰もが敏感に反応する時代になって来ました。

そこで、以前から何度も製作したタサール蚕のシーツを機能性という観点から製作し、着用実験を試みました。結果は一般に売られている家蚕のシーツより野蚕のシーツの方がより軽く、柔穏やかな眠りを誘ってくれることが判りました。『竜宮にいざなわれる様な気持ち』

なぜ、タサール蚕糸のシーツは快適か

タサール蚕はインド東北地域に生息するヤママユガ科の野蚕で、近似種に日本の天蚕、中国の柞蚕がありますが、多孔質繊維を作る生物はヤママユガ科の昆虫のみです。絹を作る生物は地球上に10万種類もいるといわれます。

タサール蚕の絹糸の20％強を孔（穴）が占め、その空間が保温、保湿を貯水池のように、体温、発汗に合わせて調節しっていると推測されます。

その温度、湿度は繭の中で身動き出来ない蛹を安全に一定期間保護するゆりかごの役目を担っていて、人も絹に覆われると、べたつかず（蒸れず）、体温を超えず、下がらず、快適と云うわけです。

さらに、家蚕も同じですが、シルク蛋白質はアミノ酸の結合が固結合の部分と軟結合の部分が有り、6割を占

める軟結合の部分が温度、湿度の貯水槽の役目を果たしているので快適なのですが、野蚕のシーツは家蚕のそれよりも多孔質ゆえんの快適性が顕著であると思われます。

もう一つ忘れてならない事は、シルクの蛋白質は必須アミノ酸で人の肌によく馴染む親和性に富んでいて、肌に異和感を覚えさせず、より安心感を満たしてくれます。

加えてシルクは抗菌性に優れているので、アンモニアを作る雑菌などの繁殖を抑制し、防臭性に富んでいます。その様な四つの条件によりタサール蚕糸で作ったシーツは気持ちが良いという訳です。

エリ蚕糸の毛布を作る

エリ蚕はインドアッサム原産の野蚕の仲間ですが、繭がフワフワ柔らかいので糸も張がなく、カシミアタッチの絹で、繊維長が短く生糸は採れませんので、絹紡糸として利用されますが、絹の付加価値である長繊維でなく、特有の艶が鈍いので、絹素材の中では最も安価です。柔らかいので伸縮率も大きく従来の絹織物的発想では上手な利用が出来ません。

色々な物を作ってみましたが、失敗作が多く、厚手のショールなどにはむいている事が判りました。

そこで柔らかさを利用した毛布を試作しました。糸足の長いフワッとしたものを作ろうと思いましたが、長期使用後、糸が寝てしまう恐れがありましたので、パイル状のシーツにしました。やや加工賃は高くなりますが、形状変化が起こらず、高級感が増して大変よい物が完成しました。

野蚕ですので多孔質な糸ですが、孔の数がタサール蚕に比べて10％未満なので、多孔質ゆえんの機能性は劣ると思われます。しかし、細くて柔らかい糸の間の空気がそれをカバーし、感触はタサール蚕のシーツとは違った、しっとりした穏やかな安堵感に包まれます。

夢のムガ蚕糸のシーツ

インドアッサム州でしか採れないムガ蚕繭の糸は細く、軽くて黄金にかがやき、野蚕糸の中では最も多くの孔（６００前後）を持つ多孔質の繊維です。

実験では『母親の胎内に居る』かと思われる様な気持ちになります。

なんとかしてこの素材でシーツを作り一人でも多くの人に利用して頂く機会を作りたく今後も努力して行きます。自然素材の持つ機能性を上手に利用する事が省エネであり、環境保護に役立つのではないでしょうか。

楽しい時間　68

2018年5月31日

山本紀久雄

明治維新150年・・・その六

江戸無血開城の功績者は誰か。という議論になると、現在、圧倒的に「西郷隆盛と勝海舟による慶応4年3月14日の薩摩屋敷における会見で決した」という説が流布されているが、これは真実でないという主張を私は続けている。

今年の4月、山岡鉄舟研究会の主任研究員である水野靖夫氏が『勝海舟の罠』を毎日ワンズ社から出版した。ここでも江戸無血開城は鉄舟と西郷によって成されたことを、史実に基づき述べられている。いずれ詳しくこのアララギでもお伝えしたいと思っている。

ところで、明治維新150年というのが今年であるが、維新100年はいつだったのか。それは昭和43年（1968）であった。したがって、昭和43年時でも100周年という記念催事が各地で行われたが、筆者には全く記憶にない。

何故に覚えていないのか。理由のひとつは山岡鉄舟研究会を主宰していなかったこと、ふたつめとしては猛烈サラリーマンを実践していたこと、最後の理由は、この年に結婚したためである。結婚相手を見つけ、その準備で多忙だったこともあるが、今から考えると、世間知らず、社会の動きに無関心であったと反省している。

NHKが特別取材班を構成し『ドキュメンタリー・明治百年』を出版したのが昭和43年12月。この本を改めて50年経って読んでみたところ、プロローグにエドウィン・ライシャワー教授が語った言葉が載っている。同氏は昭和36年（1961）から昭和41年（1966）まで、駐日アメリカ合衆国大使を務めている知日派である。

「日本は、あの鎖国の二百何十年かの間に、世界一すぐれた官僚組織をつくって、文化的にもきわめて高度なものになっていたから、維新後すぐに欧米の工業技術をどんどん消化できたのです。教育の普及も世界の水準を抜いていましたからね。徳川の封建時代ののこしたものを評価せずに日本の百年は語れません」

その通りであって、江戸幕府の功績は高いが、それから明治に移る際に、国内大戦争が起きなかったからこそ、幕府知的遺産が明治に遺されたわけで、江戸無血開城を成し遂げた鉄舟の果たした役割はすごいと常々思っており、その人間力を研究し、今日の我々の生き方に反映したいという目的で山岡鉄舟研究会を主宰しているのである。

さて、前号の続きである。

賞勲局員は、鉄舟が「おれか。君主に臣民が為すべきことを為したまでで手柄顔は出来ないさ」という言葉に困って、賞勲局総裁の三条実美公に報告したところ、三条は岩倉具視公に連絡、岩倉公も「それは変だ」と鉄舟を呼び出し尋ねた。

鉄舟も岩倉公の前では嘘も言えず「実は、勝からあのような書類が出ていたので、勝の面目のため自分は手を退いた」と答えた。

岩倉公は鉄舟の人格高潔さに感服しつつも、正しい史実を遺すべく、鉄舟から当時の談判事実を詳しく聞き取って、漢

学者の川田剛に漢文で書かせ、明治の三筆の一人である巌谷修が六朝楷書でしたためた》

現在、名刀「武蔵正宗」と史料『正宗鍛刀記』は、「刀剣博物館」に保管されている。その経緯は、鉄舟から岩倉具視へ贈呈され、岩倉家から藤澤乙安氏へ売り渡され、その後、藤澤家が「刀剣博物館」へ寄贈し現在に至っている。

では『正宗鍛刀記』に記された内容と異なり、世間で「西郷と海舟によって無血開城が成された」という説が流布されているのはなぜであろうか。

そのひとつの大きな要因として挙げられるのが、海舟自ら《ナアニ、維新の事は、己と西郷でやったのサ》（『勝海舟全集』第20巻「海舟語録」講談社・「明治31年1月30日」）と、書き述べていることが影響している。

多分、明治中期、鉄舟が存命中の明治21年（1888）ごろまでは、「江戸無血開城は鉄舟の功績」といのが、世間で当たり前の認識であったに違いない。

それを証明するのが、前記した明治政府の維新功績調査における賞勲局員の疑問である。この頃は誰もが鉄舟が「一番槍」であることに疑問を持たなかったのではないか。

ところが、後世の歴史家たちが、史料を集め分析していく過程で、誤った見解がつくりだされたのではなかろうか。

その一つの事例として、江藤淳氏の『海舟余波』の記述を取り上げたい。その一節にこうある。

《鉄舟山岡鉄太郎が、駿府に到着して西郷吉之助と会見したのは、3月9日のことであった。（中略）しかし、この同じ日、江戸でひそかにおこなわれていたもうひとつの重要な会談については、人は意外と知るところが少ないのである。それは軍事取扱勝安房守義邦と、英国公使館通訳官アーネスト・サトウとの秘密会談である。サトウはそのメモアールに記している》

江藤氏が言う《そのメモアール》とは、アーネスト・サトウの著書『一外交官の見た明治維新』（岩波新書）の190頁の文言である。

《3月8日に私は長官と一緒に横浜に帰着し、3月9日には江戸へ出て、同地の情勢を探ったのである。私は野口と日本人護衛6名を江戸へ連れて行き、護衛たちを私の家の門のそばの建物に宿泊させた。私の入手した情報の主な出所は、従来徳川海軍の首領株であった勝安房守であった。私は人目を避けるため、ことさら暗くなってから勝を訪問することにしていた》

この記述から、ほとんどの学者・作家・評論家等識者は、この3月9日江戸派遣時に、サトウが直ぐに海舟に会ったと錯覚してしまう。

ところが、これは完全なる誤りである。恐ろしいことに江藤氏は、サトウの原文意味を確認せずに、海舟がサトウと会談したと断定しているのである。

『一外交官の見た明治維新』の原文〝A Diplomat In Japan〟には、3月9日江戸派遣時について、〝used to visit〟と書かれている。〝used to〟は過去の習慣（よく○○したものだ）を表す文法である。この原文を確認せずに思い込みで断定しているのである。次号続く。

漢詩研修（二十一）

千代田岳精会　平井茂行

楠公子に訣るるの図に題す　　頼山陽

海甸の陰風草木腥し
史編特筆姓名馨し

一腔の熱血余瀝を存し
児曹に分与して賊庭に灑がしむ

海甸陰風草木腥　　史編特筆姓名馨
一腔熱血存余瀝　　分与児曹灑賊庭

【作者】頼山陽（一七八〇～一八三二）江戸後期の儒者。漢詩人、史家。名を襄（のぼる）、字を子成、号を山陽あるいは三十六峰外史とも。通称を久太郎。芸州竹原の人。広島藩儒者頼春水を父に大坂の町医者飯岡（いいおか）義斎の娘静子（一七六〇―～一八四三。号を梅）を母に、その長男として安永九年大坂・江戸堀に生まれる。二十一歳、突如脱藩出奔したが探し出され、二十四歳まで自宅の一室に幽閉された。この間に『日本外史』の草稿執筆が始まったという。一八一一年、京都に出て塾を開いた。日本の武家の歴史を記した『日本外史』は、一八二六年（文政九）に成り、死後出版され幕末の志士たちに読まれて山陽の名を有名にした。ほかに『日本政記』、『山陽詩鈔』、『日本楽府（がふ）』、『山陽遺稿』などの著作がある。天保三年九月二三日、肺結核により五三歳で没した。

【語釈】※楠公訣子図…「楠公」は楠木正成公（一二九四～一三三六）。南北朝時代の武将。後醍醐天皇に仕えて建武の中興の業に大功があり、のち足利尊氏が反乱を起こしたとき、これと闘い、九州に追ったが尊氏の東上に際し、摂津の湊川にこれを迎撃、衆寡敵せず戦死した。「子」は正成の長男の正行（まさつら）（一三二六～一三四八）。正行は後村上天皇のとき、住吉・天王寺両所の合戦に大勝したが、四条畷の戦いで敗死した。図は楠公が湊川に赴くにあたり、子の正行と摂津の桜井の駅で最後の別れをしたのを描いたもの。

『頼　山陽をめぐる女人たち』

中屋保之

頼　淳子　最初の妻。寛政十一年（一七九九）、山陽二十歳淳子十六歳で結婚。翌年山陽の脱藩事件により離縁となるが、嫡子聿庵（頼家の宗主継承者）への書状を残している。

頼　梨影　後妻。文化十二年（一八一五）、山陽三六歳梨影十八歳の時に結婚。京都の蘭医の元で奉公していた折に見初められる。三六歳で山陽と死別、その後も三人の子どもを立派に育成したことで、京都町奉行所より『女子の亀鑑』として褒賞されている。男児は後の儒学者頼史峰と勤王の志士頼三樹三郎である。

平田玉蘊　尾道の豪商福田屋の次女として生まれ、地元では「ぎょくおんさん」と親しまれている。四条派の画家として全国にその名を轟かせた女性。文化四年（一八〇七）、頼一門が竹原に集い詩会が催された際、尾道より玉蘊姉妹も招かれた。その折の玉蘊の姿を山陽は、

絶塵風骨是仙姫　絶塵の風骨これ仙姫
却画名花濃艶姿　かえって画く　名花　濃艶の姿を
應知今夜空門会　まさに知るべし　今夜　空門の会
欲向香龕供一枝　香龕に向かいて　一枝を供えんと欲す

「一点の塵もついていない清らかな気品は、まさに仙女、この世のものとは思えない美しさだ」と詠み、そのことを周りの友人たちに告白している。玉蘊の師であった菅茶山を介し二人の距離は接近する。山陽も茶山の私塾塾長として招かれている。上洛し塾を開いた山陽は、玉蘊に上洛を促しておきながら結局山陽とは結ばれることはなかった。

江馬細香　天明七年（一七八七）四月、美濃国安八郡藤江村（現岐阜県大垣市藤江町）で生まれた。大垣藩の藩医であった父の江馬蘭斎は、自宅に蘭学塾を開いて多くの門弟を教えた。そのかたわら当時の知識人の常として詩作を好み、細香も幼いときから読み書きや詩作の手ほどきを受けた。文化十年（一八一三）十月、

細香が二七歳のとき、美濃を遊歴中だった頼山陽が江馬蘭斎のもとを訪れ細香と出会い、二人の間に恋が芽生え、二人の間の関係はその後も続いた。香細の上洛は七度に及び、半月から一か月の滞在の都度、直接山陽の教えを受け、時には詩酒の会や花見、紅葉狩りの吟行にも同行している。詩稿がある程度まとまると、それを京都の山陽のもとへ送り、山陽からは朱筆で添削し、批点、圏点をほどこし、評を書いたものが送り返されてきた。

静夜沈沈著枕遅　静夜　沈沈として　枕に著くこと遅し
挑燈閑読列媛詞　灯をかかげて　閑かに読む　列媛の詞
才人薄命何如此　才人の薄命　何ぞ　かくの如き
多半空閨恨外詩　多半は空閨　外を恨むの詩

細香の詩には恋情を詠ったものが多く、山陽もまた彼女を門人として、病を発するまでの十八年間、たゆまず熱心に指導を続けたのだった。

頼山陽は天保三（一八三二）年九月五三歳で亡くなった。細香四六歳のときである。

晩年、細香は動脈硬化が原因で喀血するが、病状が慕っていた山陽に似ていることをむしろ喜んでいたかのような詩を残している。

嘔血歳残憑枕時　嘔血す　歳残　枕による時
只憐病状似先師　ただ憐れむ　病状　先師に似たるを
人間司命冥官録　人間　司命　冥官の録
無用如吾毎被遺　無用　われの如きは　つねにわすれらる
情味冷於灰　情味　灰よりも冷ややかなり
無病身仍瘦　病い無きに　身はなお瘦せ
綿衣欲窄裁　綿衣　せまく裁たんと欲す

細香が亡くなったのは文久元年（一八六一）九月四日の早朝、七五歳だった。

「歴代天皇御製歌」（九十）

貫名海屋資料館

「大正天皇」③（大正六年―一九一七―三十九歳）

日の本の國のさかえをはかるにもまなびの業ぞもとゐなるべき

苗代

苗代の水ゆたかにもみゆるかな引くしめ縄のひたるばかりに

扇

手にならす扇の風もあつき日は門守る人のつらさをぞ思ふ

野徑

學舍は遠くやあるらむ朝まだき野道をいそぐうなゐ子のむれ

天盃

今日たまふおほみ盃さかづきに添へる心も臣は酌むらむ

綱

山川をさかのぼり行く船みれば綱一筋ぞいのちなりける

季王の國へかへるわかれに

十とせへてふたゝび會ひし君にまた別るゝ今日はかなしかりけり

月前陳思

さやかなる月にむかへばなか〳〵に心ぞくもる昔しのびて

天の下くまなくてらす秋の月夜の月を心のかゞみともがな

家

外國のさまをうつせる家もあれど白木づくりぞゆかしかりける

衣

たらちねのみおやの衣さらしつゝうら悲しさのまさる頃かな

夕雨

かきくらし雨降り出でぬ人心くだち行く世をなげくゆふべに

猫

國のまもりゆめおこたるな子猫すら爪とぐ業は忘れざりけり

社頭暁

神まつるわが白妙の袖の上にかつうすれ行くみあかしのかげ

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

2018年4月23日

気温差から身体を守る

昨日の暑さにはビックリしましたね
ただ
湿度が低かったので
南の島の様な心地よさがありましたね
ここ最近の寒暖差により
胃腸の調子を崩したり
熱が出たり
鼻水が止まらなくなったり
咳が出たり
といったヒノキ花粉の症状にも似た
風邪が流行っています
中々区別が難しいですが・・・
どちらにもいえることは
○睡眠時間は　23時～4時は必ず寝ている様に
○水分は　体重の30分の1を摂取する様に
○暑いからといって
　氷の入った飲み物をなるべく飲まない様に
○就寝時ゆたぽんを使い体温を上げて
○マヌカハニー＆乳酸菌を
　朝晩摂取しましょう
まだまだ季節の変わり目です
身体を労わっていきましょう

２０１８年５月16日

足のつり

陽射しが強いですが
日影が涼しく風が気持ち良いですね
夏と違って
朝晩が涼しいので快適です
ここ最近の症状として
足がつる
皮膚の乾燥
目の違和感
などが出やすくなっています
足がつるのは基本的には水分不足です
気温が上がり
思った以上に汗をかいていて
体内の水分が不足するということです

もう一つは
汗をかくとミネラル分が不足します
ですので食事にミネラル分を含むものを
増やしてみて下さい
（もずく　わかめ　梅干し　など）
ただ
寒暖差で胃腸の問題も出ます
腸の調子が悪いと
ミネラル分もいくら食べても
吸収しにくくなります
ですので
胃腸の動きを血流を良くする為に温める
湯船とゆたぽん
暑いですがそのまま
続けてみて下さいね

御津磯夫短歌鑑賞　7

「月虹」　鮫島　満

宝飯を豊飯と書かせ給ひし封書あり飯豊山見ゆる上山より

『かうしんばら』昭和五十七年

作者の手許に一通の封書があるというのである。それは飯豊山の見える上山から届いたと補足している。

この一首は単純そうに見えて、実は複雑な事柄を含んでいる。まず、この手紙の差し出し人は誰か。上山とあるから斎藤茂吉か。いや、そうではない。茂吉は故郷の金瓶が上山に編入される一年前の昭和二十八年に没しているからである。「宝飯」は作者の住む御津町のある郡名であった（現在は御津町は豊川市に編入されている）。「飯豊山」は、新潟県、山形県、福島県の県境にある山の名で、「イイデサン」と読む。「上山」は金瓶を含んで昭和二十九年に発足した市名である。

それでは誰か。この歌の前に、

いつの時もやさしきことばたまはりきテル子夫人も亡し編輯所便

われに来て四季折々のゑまひあり南青山のかうしんばらの花

という二首があるから、手紙の主は作者の師土屋文明であろう。この歌が詠まれたころ文明は「アララギ」の編集発行人であり、この昭和五十七年に文明夫人のテル子が逝去しているから「アララギ」の編輯所便にその告知が載っていたのであろう。

この手紙書かれたのはいつだろうか。それは茂吉亡き後、金瓶が上山に編入された後のいつかである。文明の年譜によると、昭和三十八年と三十九年に東北を旅行しているからこのうちのどれかであろう。

次に、封書の宛先の宝飯をなぜ「豊飯」と書いたのか。文明は上山から見える山の名を「飯豊山（イイデサン）」と知り、その読みに拘りを持ったのではないだろうか。そして、その日、手紙を書く時に「宝」と書くべきところを「豊」と書いてしまったというのが私の推理である。

「氷魚」のことから（210）

岡本八千代

今年の今ごろ（五月の終わり頃）は、わが庭の小さな小さな築山にホトトギスの花が咲きそうだ。しばらく絶えたのかと思っていたからうれしい。

子規と書いて子規（ホトトギス）とも読むから…。私の書棚に「昭和を生きた」という本があって、開いてみて驚いた。なんと、作者は、南設楽郡の作手村の橋本幸子さんという人で近い所の人であり、しかも子規と同じ松山の町に生まれた人で、子規のことを「子規先生」と呼びよく知っている方（かた）だった。私はお会いしたこともないし、全く面識のない方だったから。

この本の、「横顔」（68頁）という処で、「正岡子規は、水晶のごとく多面体の輝きを持っていたろうと思う。いろんな分野に興味があり、それなりに究明したに違いない。通常の人から見れば、好き安の飽き安といわれそうな程。それがまた魅力となって、大勢の若者がこの渦（うず）の求心のような子規をとり巻いて、彼らも結構楽しんだり励んだりしたことであろう。」と述べてある。

また、「子規は人徳というか寂しがりやの裏返しなのか、他人と楽しい座を作ろうとする人であったという」とも書かれていた。

この方に一度お目にかかりたいなあと思ったりしたが…

今となって思い出してきたことは私が歌集を作った時、豊橋の印刷社の方が「参考までに」と言って。私に下さった本であったことなのだった。

また、子規のこと―。

「中学生の時、他の者に情報を集め書かせ、自分が主筆編集して、葉書大の新聞を作ってみたりしている。お山の大将的な生得のものが、あの横顔にはある。首領（いやドんといった方がよいか）になるには、鋭敏では人が居付かず、軽量では鎮座できず、大様そうでもって頑固、時にチラリと弱点を仄めかす度胸も必要となれば、なかなか以て常人ではなり難い。」とも述べている。

また、虚子の文章にも「東京仕込みの人々にくらべ、あまり田舎者の尊敬に値いせぬような風采であったが、しかも自ずから此の一団の中心人物であるごとく」ともある。

橋本さんは言っている。「これは、生い立ちの影響も大きかろう。六歳で家督を相続し、母子家庭のたった一人の男として、大切にされ期待され、皆の手の温もりで一本の棒を立てるが如くである」と。

「正岡家は武士でなくなった時、家禄奉還金千二百円を受けている。三人家族つつましく暮せば、安心して過ごせたのではあるまいか。子規の成人までは。」とも述べている。

橋本幸子さんの「昭和を生きた」のおかげで、いつのまにか6頁まで書くことができた。

どうも私と同じ年の人かと思う。「サイタサイタサクラガサイタ」の国語の本のことがあったから。どうしてもお目にかかりたい人と思いつつペンを止める。

編集室だより【二〇一八年五月】

○芝・増上寺へ吟行。
三解脱門、「むさぼり、いかり、おろかさ」三つの煩悩を解脱して、重要文化財の山門に入る。境内を巡るうち、なぜか懐かしさにあふれた。
三縁山広度院増上寺。酉誉聖聰上人により創建、室町時代、浄土宗の伝法制度を確立。江戸期より、徳川将軍家の菩提寺。浄土宗の伝法制度確立。その法脈は伝えられている。

○「増上寺」開山聖聰の弟子の百済の僧、慧灌により創建された三河の「大恩寺」は、徳川家康の父（松平広忠）により大恩寺と改名され、徳川家に大恩のある寺として、御津山、浄土真院。法然三河7番札所。
三河アララギの故里。私の故里。毎日親しんだ大恩寺は、増上寺と深く関係のあることがわかってきた。

○二〇一一年、法然上人入滅八百年忌の歌碑。
「池の水人のこころに似たりけりにごりすむことさだめなければ」
「月かげのいたらぬ里はなけれどもながむる人のこころにぞすむ」

○皇女和宮の歌碑　「徳川家茂夫人」
「は、そはの散（ちり）し秋さへ思ひ出て一方ならず袖はぬれける」（亡き母、観行院を偲び涙にくれた和歌）

○世界最大級のダンス・ミュージック・フェスティバル・EDC
幕張海浜公園、マリンスタジアム、マリンビーチ…へ出掛ける。
ロスアンゼルス・ラスベガス・ニューヨーク・プエルトリコ・メキシコ・ブラジル・インドなどなど経て、東京にやってきた。
世界のアーチスト達の造り出す大音響・10万人かと集う若者達のパフォーマンス…こんなめちゃくちゃにまぎれて若返る。

○お台場海浜公園で開催された「未来型花火エンターテインメント「スターアイランド」へゆく。3Dサウンドを駆使した最先端ミュージック、花火エンターテイメンメントショー。
日本の誇る花火職人と、日本最高峰のクリエイター集団が融合、まだ誰も観たことがない、一夜限りの特別な空間でした。
水圧で空を飛ぶパフォーマンス。LEDを装着していて、これはいったい何！とあきれてしまう見ものでした。55基に及ぶスピーカーからの様々な音が動きまわり、新しい花火が海と陸との会場を包み込んだ。この新しさ、すっかり私に取り込んだ。

○「滝野川探検隊」のホームページを見ていた、偶然、「カイロプラクティックの本田先生の『本田のひとり言』」に出会いました。ほとんど毎日にわたる「先生のやさしさ」は心に染みました。三河アララギ誌への掲載をお願いし、「私の安心」を、皆様にお届け出来ることを喜びます。本田先生、ありがとうございます。

野菜・まんだら

（5）小松菜

○アブラナ科の野菜。チンゲン菜、タカ菜、からし菜等の仲間。
○中央アジア、北ヨーロッパにかけて自生していた。
○中国を経て奈良時代には日本に伝ってきた。
○江戸時代、江戸川区小松川付近で、江戸名産の葛西菜を小松川村の椀屋久兵衛が改良したと伝えられる。
○将軍綱吉とも吉宗ともいわれるが、鷹狩りの際に献上し、その地名にちなんで「小松菜」と命名された。
○昭和58年、世田谷大蔵の安藤淳夫氏の育生した安藤早生小松菜から、種苗名称登録された。
○耐寒性が強く、周年栽培されるが、霜が降るころから甘みが増す。
○ビタミンＡに富み、鉄などミネラルが豊富。カルシウムの含有量が高く、骨粗鬆症の予防に評価される。ビタミンＫ、骨の形成など関与。
○３，４月に種まきして、「つまみ菜」を「鶯菜」とよびあくが少ない。
○小松菜は花が開くと“えぐみ”がでるから、蕾のうちに食すると良い。
○関東では、正月の雑煮に欠かせない。
○漬物、一夜漬のように短時間で漬ける方法が向く。
○油を使う料理では、ビタミンＡ、Ｂ2、Ｃ、鉄分、カルシウムが効果的に吸収できる。

○緑濃い小松菜と油あげとの炊きあわせは本当においしい。
○小松菜焼酎、和菓子、パン、ピザ…何にでも同化する。

森岡・今泉

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所　〒一一四-〇〇二二
東京都北区王子本町一-二六-六-A
TEL（〇三）五九二四-二〇六五
◇URL　http://imaizumiyuri.jp/
E-mail　yuriimaizumi@jcom.zaq.ne.jp
◇編集・発行　今泉由利・森岡陽子
◇三河アララギ誌は毎月発行します。
◇会員・今まで会員の方。希望される方。
◇会費制　廃止。
◇新しく購読を希望される方　一ヶ年五千円。
◇振替口座　〇〇八三〇-六-五六二二九
◇原稿送付先　〒一一四-〇〇二二
東京都北区王子本町一-二六-六-A
◇原稿は毎月末日までに郵送下さい。